

2023

# 年次報告



日本めだかトラスト協会

## 開催告知!!



今年は、福井県越前市でお待ちしています!!

# 全国めだかシンポジウムin越前 2024年10月25日(金)~26日(土)

会場:越前市市民プラザたけふ

私たち武生めだか連絡会は、1999年に結成し今年25周年を迎えます。これまで過去2回越前市においてシンポジウムを開催してまいりました。

その越前市は、今や注目の的。今年のNHK大河ドラマは、紫式部が主人公の「光る君へ」です。紫式部が生涯一度だけ都を離れ暮らしたのが越前市と言われています。そして、3月16日北陸新幹線開業と合わせ「この上ないタイミング。二つの追い風に乗って、市をPRしたい」とがんばっています。

シンポジウムの内容といたしましては、最近は観賞用メダカブームですね。いろんなメダカがありますが、ハウスネーム《紫式部メダカ》がいる事をご存知ですか?私たちは、在来種のメダカの保全だけでなく、改良メダカの事も理解していかなければならない時代なのかもしれません。

そんなことも、みなさまとお話しできればと思っています。たくさんみなさまのご参加をお待ちしています。

武生めだか連絡会



日本めだかトラスト協会  
事務局:武生めだか連絡会

## 目次

基調講演 野生ミナミメダカの生態~繁殖行動に着目して~

国際基督教大学 特任教授 小林 牧人 4

### 活動報告

01 NPO法人 四街道メダカの会 理事長 任海 正衛 12

02 六方めだか公園(兵庫県豊岡市)公園長 岡本 邦夫

03 野生メダカを見守る会(群馬県) 大山 啓三 13

04 横浜メダカの会 会長 有馬 武裕・MEDAKA 代表 田村 安弘

05 武生めだか連絡会 橋本 弥登志 14

06 ウェットランド中池見 笹木 智恵子

07 めだかの学校かごしま 久本 勝紘 15

会長のおじゃましますコーナー 尾田 正二 16

ワークショップ【捨てメダカをゼロにするために】 18

懇親会写真 19

### NPO法人 四街道メダカの会の活動見学

1 たろやまの郷 20

2 成山川とメダカ田んぼ 21

感想 2023全国めだかシンポジウムに参加して 22

# 野生ミナミメダカの生態 ～繁殖行動に着目して～

国際基督教大学 特任教授 小林 牧人

第21回全国めだかシンポジウムにおいて野生ミナミメダカの繁殖行動の話をしていただきました。私の研究は、生態学という基礎科学的な観点というよりは野生メダカの保全のために何を明らかにしたらよいか、ということに念頭に保全の観点から行ってきました。それはこれまでに日本の生物学者が野生メダカの研究をあまり行ってこなかったということがあります。成瀬清氏の論文によると、1912年にヒメダカが初めて実験動物として扱われたとのこと（笹土ら,2014）。それから私が日本の野生メダカの繁殖生態の論文を出版したのが2012年（小林ら,2012）で、この間、100年間、日本の生物学者はヒメダカをモデルとした研究に邁進しますが、野生メダカは忘れ去られてしまったようです。ヒメダカを使った研究は、そのほとんどがヒメダカをモデル動物とした基礎研究で、メダカという魚の性質を理解するための魚類学研究ではありません。日本の野生のメダカのことをもっとよく知ろう、という研究は残念ながら日本の生物学の研究者はあまり行ってきませんでした。その間に日本の野生メダカはその個体数が減少し、絶滅危惧種に指定されてしまいました。

私が最初に野生メダカの研究を始めるときに考えたことは、飼育室のヒメダカから得られた研究の知見は、野生メダカの保全に役に立つのだろうか、ということです。ガラス水槽の中のヒメダカは、メダカ本来の生活、行動をしているのだろうか、もし人工条件下での特殊な行動をしているとしたら、それは野生メダカの保全に役立たないかもしれない、と考えました。そこでまず野生メダカの繁殖生態についての記載、記述があるかどうか、調べました。

私が野生メダカの研究を始めた2008年にグーグル・スカラーで「medaka, メダカ」と入力すると約30,000編の論文があることがわかりました。しかし、「wild medaka, 野生メダカ」と入力すると文献数はわずか150編に減りました。さらに「medaka ecology, メダカ生態」と入力すると文献数は70編でした。しかもその中には繁殖生態についての論文は1編もありませんでした！これは、野生メダカがいつ、どこで、どのように産卵をしているのか、学術的には誰も知らない、ということになります。またこのことは、野生メダカのためにどのように環境を保全するのか、修復するのか、誰もわからない、ということです。また野生メダカが産卵している環境を破壊しても誰も気がつかない、ということになります。それまで私はキンギョをモデル動物としてホルモン、性行動のことを飼育室内で研究をしてきましたが、日本人の生物学者があまり野生メダカの研究をしていないことには驚きました。

そこで我々の研究グループは3つの人工の池と1つの自然河川をフィールドとしてミナミメダカの繁殖行動および繁殖環境（守るべき環境）についての観察、調査を行いました。手前味噌ですが、詳細は拙著「日本の野生メダカを守る 正しく知って正しく守る 2020, 生物研究社」をご参照頂ければと思います。簡単にまとめますと、ミナミメダカは春から秋までほぼ毎日産卵をします。夜が明けると雄が雌に求愛行動（「求愛円舞」）を行い、お昼前までに産卵行動は終わります。雌と雄が放卵・放精（「抱接」と「ふるわせ」）をする際は、水草、苔などは要りません。抱接の際、雄は背鰭と尻鰭をまげて雌を抱きかかえるような行動をとります。雌雄の抱接後、雌は腹部に受精卵をつけて、雌だけで「産み付け行動」を行います。このとき、雌が「産み付け行動」するには適切な「産み付け基質」と適切な環境条件が必要です。雌は「産み付け基質」として繊維状の水草、苔、陸上植物の水中根などを好みます。また産み付け場所は水面近く（0～5 cm程度の水深）で、流れの緩やかなところ。雌は、午後の3時ごろまでに受精卵の産み付けを終えます。実際に野生ミナミメダカの産卵期に池や川といったフィールドでミナミメダカの卵探しをすると、どんなところを好んでミナミメダカが卵を産み付けているのか、よくわかります。私は卵をみつけるたびに、ああ、ここをコンクリートで固めたらだめなんだ、と考えながらミナミメダカの卵の採集をしていました。

これまで受精卵をもった雌は「こすりつけ」、「ふりおとし」という行動をとるとある本には記載されていますが、野生ミナミメダカではこれらの行動は見られませんでした。実験室で受精卵をもったヒメダカを使って実験をすると「こすりつけ」、「ふりおとし」という行動は、水槽内に「産み付け基質」がないときに雌が行う、異常行動であることがわかりました。水槽内に適切



な「産み付け基質」を入れておくと、雌メダカは正常な「産み付け行動」を行います。メダカが本来行わない行動が、メダカの正常な行動のように書かれている、ということに対して生物学者、魚類学者として複雑な気持ちになりました。

また野生メダカの雄のスニーキングを池で観察することができました。スニーキングには、ペア産卵をしている雌雄のメダカの雌を挟み込むようにスニーカーが放精をする「同時スニーキング」と、ペア産卵のあとにスニーカーが雌の保持している卵に放精をする「産卵後スニーキング」があります。我々は、野生の雄のミナミメダカが池の中で産卵後スニーキングを行うことを観ることができました。私は、雄メダカのスニーキングは、ガラス水槽内に過密に魚を入れた時のヒメダカの異常行動かと疑っていましたが、広い池の中で野生の雄のミナミメダカがスニーキングを行ったことから、スニーキングはメダカ本来の正常な行動であることがわかりました。「こすりつけ」、「ふりおとし」と同様、思い込みはだめですね。

## 野生ミナミメダカの生態 ～繁殖行動に着目して～

次に4カ所のフィールドで観察をして明らかになった行動が飼育室で再現できるか、実験を行いました。「産み付け基質」の選好性、産み付けの水深の選好性など、フィールドでの観察結果とほぼ同じことが再現されました。これらのことは、野生ミナミメダカが自然条件下で行っている行動は、たまたまその環境だけで行っている行動ではなく、メダカの本質的な行動であることが示されました。また飼育実験を行うメリットとしては、メダカが好む環境条件だけでなく、メダカが好まない環境条件という知見も得られます。このような知見はメダカの保全活動を行う上で有効な情報となると考えています。たとえば壁面をコンクリートで固めた水槽では、雌メダカは「産み付け行動」ができず、受精卵を「こすりつけ」、「ふりおとし」といった悲しい行動で、卵を廃棄します。実際に野生メダカの保全活動を行っている方々は、こういうことを知らなくても長年の経験と勘で、上手に自分達の池で野生メダカを繁殖させています。

私としては、私の研究成果は、河川改修を行う土木関係者・研究者、そして飼育室のヒメダカしか見たことのないヒメダカ研究者に知ってもらえればと思っています。川、池の岸をコンクリートで固めるのは洪水の予防になりますが、雌メダカは卵を産み付けることができず、水底に卵を落としてしまうでしょう。おそらく受精卵は泥をかぶって酸欠で死ぬか、捕食者に食べられてしまうでしょう。野生メダカを守るには、メダカがすめる環境だけでなく、メダカが繁殖できる環境（仔魚の発生も含む）を守ることが重要です。野生メダカの保全を考える人々の間では、川や池の水に親しむというのは、子どもが水に入って魚採りができる、ということを考えますが、一部の土木関係者は、川に親しむというのは、川岸をハイヒールで歩けるような整備されたところを歩くことなのでしょうか。ついでながら最近、練馬区のある川の川岸がまさにそのような形状に整備されました。



講演で紹介させていただいたメダカの繁殖行動のビデオは、皆様にお楽しみいただけただのではないのでしょうか。私は野生メダカの行動を直接自分の目で観て、ますます野生メダカが好きになりました。皆様も皆様の保全されている池のメダカの繁殖行動を観察されてはいかがでしょうか。ただし、いくつか注意点があります。まず夜明け前に池に行く必要があります。夜が明けて明るくなると、雄の求愛行動が始まります。池に近づくと、メダカは池から3mくらいまでの範囲が見えているようです。池の岸まで行かなくても、メダカは観察者を察知して皆、池の反対側に逃げます。そこで我々は池の岸に着いたら、身体を動かさないように、じっと石のようになって観察をします。しばらくするとメダカたちが戻ってきます。また観察者が少しでも身体を動かすとメダカは警戒して逃げていきます。5分くらいでメダカたちは戻ってきます。疲れてしゃがんだり、立ち上がったたりするとメダカは逃げて、また観察は最初からやり直しです。トンボが素早く水面を飛んでもメダカはおびえます。場所にもよりますが、広いところでサギなどの鳥がいるところでは、白い服を着ていると、石のようにじっとしてもメダカたちはおびえるようです。群れ(school)とも群がり(aggregation)とも呼べない異様な行動をとります。おそらく白い服を着た人間をメダカは大きなサギに狙われていると感じるのでしょうか。大学の飼育室で野生魚を飼っていると、魚種によっては白衣を着た研究者におびえることがありました。また飼育室で、キンギョ、ヒメダカと川から採ってきた野生ミナミメダカの水槽を並べてこれらの魚を飼っていると、私が近づくとキンギョ、ヒメダカは、餌が欲しくて寄ってきますが、野生ミナミメダカは水槽の奥に逃げていきます。この私になつかない野生ミナミメダカの頑固な性格が私は大好きです。

また皆様の管理している池、田んぼで、メダカの卵探しをしてみてください。これには池に入るための胴長を着る必要があります。陸上から卵を探すのは困難です。それでも水に入って水草、苔、水中根などに付着しているメダカの卵を見つけた時は、感動すること間違いなしです。自然の中での宝探しです。だれも知らなかった自然の中での野生メダカの営みに触れると、ますます野生メダカに愛着がわきます。

また今回、メダカについての基本的な注意点についてもいくつか、説明をしました。メダカの繁殖行動において「交尾copulation」という言葉を使う人がいますが、生物学では、「交尾」とは体内受精のための行動と定義されており、この言葉を体外受精のメダカに適用するのは生物学的、魚類学的に間違いです。メダカの場合、正しくは「抱接wrapping」です(早川ら, 2012; 小林ら, 2012; 矢部ら, 2017)。矢部ら(2017)の「魚類学」という教科書をご参照ください。またヒメダカを使った実験で、対照群を「野生型」、「wild type」と論文に書く人がいますが、ヒメダカは体色突然変異個体ですから、野生型ではありません。これも生物学的に間違いです。もし、野生メダカとヒメダカを比較する実験を行ったとしたら、対照群はなんと呼ぶのでしょうか。それぞれ、野生メダカの野生型、ヒメダカの野生型、となるのでしょうか。これはありえないですね。どちらも「対照群 control」とするのが生物学的に正しい表記です。ちなみにショウジョウバエをモデルとして使っている生物学者は、実験群に対して、野生型という言葉は使わずに「対照群、control」としています。

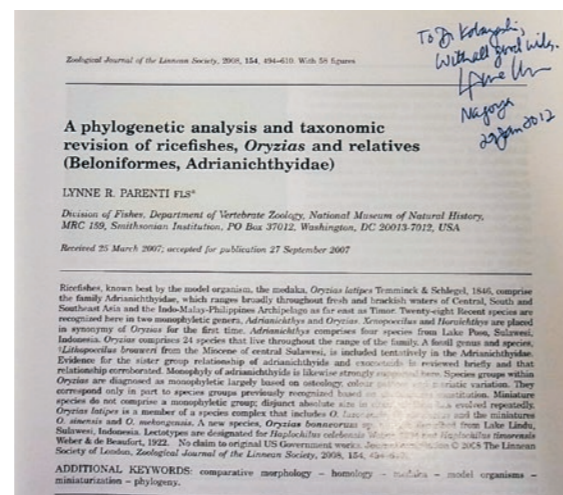
## 野生ミナミメダカの生態 ～繁殖行動に着目して～

このような、交尾、野生型といった用語をヒメダカ研究者がうちわで使うのはかまいませんが、それはたとえで言うところローカルグループの「方言」です。絵本、図鑑、論文などでは生物学・魚類学における学術的な用語、すなわち誰もが理解できる「標準語」を使うのがよろしいのではないのでしょうか(細谷ら,2020)。特にヒメダカをモデル動物として使っている、メダカという魚類についての魚類学用語を知ることが、研究者としてのアカデミズムかと思われれます。そしてうちわの「方言」はやめる方向であってほしいと魚類学者は願っています。

メダカの性成熟については、春の日照時間の延長で性成熟が促進すると誤解をしている人がいますが、ミナミメダカは、春は水温上昇で性成熟が開始します(淡路, 1990)。この時は、人工的に短日にしても長日にしても性成熟は促進します。春は、光周性(日照時間の変化に反応する性質)はありません。夏の間に光周性が発達し、秋になると水温は卵を産むのに十分暖かくても、日照時間の短日化によって産卵をやめます。この時に、飼育下で人工的に日照時間を長くすると、メダカは卵を産み続けます。そして冬になると屋外にいるメダカでは光周性は消失します。日照時間が一番長いのが6月で、水温が一番高いのは8月で、それぞれのピークにずれがあります。それをメダカは感じているんですね。淡路氏は1年を通じて水温、日長のメダカの性成熟への影響を精査しました。その結果、このようなおもしろいことがわかりました。おそらく、最初にメダカの性成熟促進の環境要因の実験をした人は、秋に実験を行って、メダカは長日で性成熟が開始する、という結論を得て、それを春でもそうだと思い込んだのではないかと思います。最近出版された英文のメダカの本でも、私は、メダカは春の水温上昇で

性成熟が進む、と書きましたが、別の章をみると、メダカは春の日照時間の延長で性成熟が進む、とあります(Kobayashi et al. 2020)。その章の執筆者の誤解、編者の見落としですね。一方、ヒメダカのd-rR系統という系統では、室内で水温27℃で飼うと、長日で生殖腺が発達し、短日で生殖腺が退縮するそうです。これは生まれてからずっと人工条件下で飼われていたヒメダカでは、1年中光周性を維持しているようです。ヒメダカ限定の性質かと思われます。

日本の野生メダカは現在、キタノメダカとミナミメダカの2種に分類されています。日本の野生メダカに2つのグループがあるということを見つけたのは酒泉満先生で、このことは酒泉先生の最大の功績かと思われます。その後、近畿大学の朝井俊信さんらによって、酒泉先生の提唱する2つのグループのメダカが、異なる2種のメダカであるということを2011年に論文として公表し、日本の野生メダカは2種ということが確定しました。2012年に名古屋大学の金森草先生が、「What is medaka?」というシンポジウムを開催し、私も出席していました。このとき、近畿大学の朝井さんに加え、メダカの分類の世界的大家であるLynne R. Parenti博士も参加されていました。



この時のシンポジウムでは、日本の野生メダカの2種の分類については、Parenti博士も含め、特に異論はありませんでした。朝井氏とParenti博士が楽しそうに話しているのが印象的でした。私にはわからない分類学者の共感があるのでしょうか。

一方、日本のメダカが2種になったので、北日本集団、南日本集団という言葉を使う必要はなくなりました。ここにかつて「集団」という言葉が使われたのは、酒泉先生の最大の失策でした。生物学では動物の体・集まりを、細胞cell、組織tissue、器官organ、個体organism、個体群・集団population、群集community、生態ecosystemと区分します。しかし英語のpopulationを生態学者は「個体群」と訳し、遺伝学者は「集団」と訳しました。ですから生物学では「個体群」と「集団」は同じ意味なのです。Populationとはある地域の同一種の集まりを指しますので、北日本といった広い地域には多数の個体群・集団populationがいるのです。それを北日本集団というのは、北日本個体群というのと同じで、北日本の多数の個体群を一つにまとめて表現してしまっているのです。さらに困ったことに、日本の生物学者はこのことを修正せずに使い続けてしまいました。酒泉先生は、おそらく「個体群」という言葉は知っている、でも「集団」が「個体群」と同じ意味ということを知らずに、「集団」という生物学用語をグループといった意味に軽い気持ちで使ってしまったのではないのでしょうか。「集団」という言葉を本来のpopulationとは異なる意味に使うのは、これもある種の「方言」、誤用ですね(北川ら, 2020)。

私の講演のあとに、各グループの野生メダカの保全活動についての報告がありました。どの取り組みも素晴らしいものでした。特に子供たちを対象としたイベントは、大学の研究室では失われつつあるnatureという感覚が、現代の子供たちの原体験としてはぐくまれているようで、強い感銘を受けました。

1日目の最後は楽しい会食があり、さらに2日目は四街道メダカの会の実際のメダカの保全池、保全水田を見学させて頂き、さらなる感銘を受けました。このような保全活動が重要であることは言うまでもありませんが、この活動の後継者を育成することも重要です。後継者を育成するにあたり、野生メダカの保全活動を趣味のひとつとしてとらえるか、社会活動・教育活動のひとつとしてとらえるか、ということが後継者育成のためのポイントとなるような気がしました。

今回の企画をしてくださった東京大学の尾田正二先生、そして会場にいらして実際の野生メダカの保全の活動の情報をくださった皆様、実際の保全場所を見学させていただいた四街道メダカの会の皆様には心より感謝申し上げます。

来年、福井でまた皆様にお会いできることを楽しみにしています。



## 野生ミナミメダカの生態 ～繁殖行動に着目して～

### 文献

淡路雅彦. (1990) メダカの生殖年周期の成立. 遺伝, 44, 52-56.

細谷和海・小林牧人・北川忠生. (2020) 野生メダカ保護への提言

棟方有宗・北川忠生・小林牧人編著. 日本の野生メダカを守る 正しく知って正しく守る  
生物研究社, pp.91-99.

小林牧人・頼経知尚・鈴木翔平・清水彩美・小井土美香・川口優太郎・早川洋一・江口さやか・横田弘文・山本義和. (2012) 屋外池における野生メダカ *Oryzias latipes* の繁殖行動.  
Nippon Suisan Gakkaishi, 78, 922-933.

北川忠生・中尾遼平・入口友香. (2020) 野生メダカの遺伝的多様性と飼育品種メダカの遺伝的特徴.  
棟方有宗・北川忠生・小林牧人編著. 日本の野生メダカを守る 正しく知って正しく守る  
生物研究社, pp.37-48.

Kobayashi, M., Kamide, S., Yokota, H., Iwata, E. (2020)  
Reproductive behavior of wild Japanese medaka. In: Medaka, Biology, Management, and Experimental Protocol, Vol.2, Eds. Murata, K., Kinoshita, M., Naruse, K., Wiley Blackwell, Hoboken, NJ, USA.

早川洋一・瀧田真平・菊池一也・吉田彩夏・小林牧人. (2012)  
メダカ *Oryzias latipes* の産卵行動における嗅覚の関与. 魚類学雑誌, 59, 111-124.

棟方有宗・北川忠生・小林牧人. (2020)  
日本の野生メダカを守る 正しく知って正しく守る. 生物研究社.

笹土隆雄・竹花佑介・成瀬清. (2014)  
モデル動物としてのメダカの特徴とメダカバイオリソース. Cytometry Research, 24, 1-7.

矢部衛・桑村哲生・都木靖彰. (2017)  
魚類学, 恒星社厚生閣.

### 演者 略歴

1956年生

1975年  
東京都立富士高校アメリカンフットボール部卒

1979年  
東京大学アメリカンフットボール部卒

1981年  
同大学農学部水産学科卒 魚類のホルモン研究

1986年  
同大学院博士課程修了 農学博士  
魚類のホルモン研究

1986-1988年  
日本学術振興会特別研究員 魚類の性行動研究

1988-1990年  
カナダアルバータ大学動物学科研究員  
魚類の性行動研究

1990-2002年  
東京大学農学部水産学科・助手・助教授  
魚類のホルモン研究・性行動研究

2002-2022年  
国際基督教大学理学科・准教授・教授  
魚類のホルモン研究・性行動研究・保全研究

2022-現在  
国際基督教大学自然科学部門・特任教授  
魚類の保全研究・マイクロプラスチック研究

**資格:** スポーツメンタルコーチ

**趣味:** キックボクシング

**著書:** 日本の野生メダカを守る 正しく知って正しく守る (2020) 棟方有宗・北川忠生・小林牧人編著 生物研究社

**受賞:** 日本動物学会奨励賞、日本水産学会進歩賞、日本水産学会論文賞、神奈川体育学会最優秀論文賞

## 第21回全国めだかシンポジウム@KASHIWA2023

主催：日本めだかトラスト協会

12月9日 (土)

場所：東京大学柏キャンパス生命棟地階講義室  
ハイブリッド方式 (オンラインでの参加も可)

トピック：第21回全国めだかシンポジウム

ミーティング ID：696 376 0595

パスコード：12345

<https://u-tokyo-ac-jp.zoom.us/j/6963760595?pwd=TDB5VlUvM2w0WwWdTSctnak8vMHoxZz09>



14:00 開会挨拶

14:05 基調講演

「野生ミナミメダカの生態 ～繁殖行動に注目して～」

小林牧人 (国際基督教大学 特任教授)

15:00 - 16:00 会員による活動報告

16:00 - 16:15 休憩

16:15 - 16:30 日本めだかトラスト協会 総会

16:30 - 17:30 ワークショップ

「捨てメダカゼロを目指すには」

17:30 閉会挨拶

懇親会 (会場未定)

12月10日 (日)

千葉県四街道市内で活動する四街道メダカの会の活動を見学

9:00 集合・出発 マイクロバスで四街道市に移動

10:30 - 12:00 四街道市内 たらやまの里、メダカ池を見学

12:30 頃 現地解散 (最寄りの JR 総武線四街道駅まで送迎あり)

9日のシンポジウム・総会への参加お申し込みは不要です。

10日の見学は参加のお申し込みが必要です。下記までメールで11月30日までにお申し込みください (参加費：3,000円の見込み)

問い合わせ先：尾田正二 04-7136-3671

[odasho@edu.k.u-tokyo.ac.jp](mailto:odasho@edu.k.u-tokyo.ac.jp)

▲イベントチラシ

# 活動報告 01

NPO法人 四街道メダカの家 理事長 任海 正衛



千葉県四街道市において市政と連携しながら市内の調整池、河川での生き物調査と生物観察会、講演会、見学会を重ねて、生態系の保全活動、市民の自然とのふれあいの促進、学校での学習支援活動を活発に実施している。

また、活動で収穫したもち米を使って新年会では餅をつき、夏場は流しそうめん大会を開催し、子供から大人まで楽しみながら交流を深めている。メダカ活動の場としてたろや

まの郷と成山(たかおの杜)メダカ池の2か所があり、水田という生態系の一員としてメダカが暮らせる環境づくりを心掛けている。

「たろやまの郷 季節の便り」を年3-4回、「めだか新聞」を年6回発行している。業者によると思われるメダカの乱獲、改良メダカ(白メダカ)の放流を経験しているほか、四街道でアライグマが初確認されたことから生態系攪乱の危険感を強めている。



# 活動報告 02

六方めだか公園(兵庫県豊岡市) 公園長 岡本 邦夫



子供たちが生きている自然を学ぶ授業の場として六方めだか公園が活用されており、公園内で子供たちがメダカやカエルを捕まえて、観察したら元(自然)に帰すことをモットーとしている。

田んぼの泥と砂場の砂を水槽に入れて待つと、田んぼの泥を入れた水槽ではいろいろな動植物が出てくるが、砂場の砂からは生き物が出てこないことを子供たちに観察させて、田んぼの泥が「生きている」ことを実感してもらっている。

豊岡市では街ぐるみでコウノトリを保全しているため市民の意識が高いためか、改良メダカの放流案件は起きていない。

東大柏キャンパスのメダカ系統維持飼育施設を見せてもらいました。メダカにもめだかトラスト協会にも、新時代への対応の必要性を痛感しました。今回は、次代に向けての提案がたくさんありました。全面的に大賛成です。きっとよい感じで進んでいけるとおもいます。

ひとつ、シンポジウムの開催場所は、1年前にきめるのではなく、数年間分を前もって決めて前進できるよう、会長さま事務局さま、御努力をお願いします。

# 活動報告 03

野生メダカを見守る会(群馬県) 大山 啓三

群馬県の中心部で利根川流域の前橋市、高崎市の地域ではメダカの生息報告が無く、群馬県内では大山さんが見つけた板倉町の水田がほぼ唯一のメダカの自然生息地である。

板倉町は渡良瀬川水系であるので、板倉町のメダカは埼玉県内の野生メダカと遺伝的に近いことがDNA鑑定の結果わかった。学校教育で活用してもらうために群馬県に協力を要請しており、3月15日にぐんぎん財団環境賞を受賞した。今後も粘り強く活動をして、貴重な群馬県の野生メダカを見守っていききたい。

